

# 女子大学生のキャリア意識に関する縦断的研究 II

～ 2018年度・2019年度入学生の4年間の成長の比較～

## A Longitudinal Study of Career Attitudes of Female College Students II

鶴 田 美保子

Mihoko TSURUTA

### 問題と目的

#### 1. 問題の背景

キャリアを探索する時期にあたる大学時代を、学生たちが充実した成長の時と捉え、自分自身の人生を主体的にデザインし、その実現に向けて積極的に行動できるように支援することが、キャリア教育と大学全体に求められる。金城学院大学では、2004年より「キャリアデザイン形成」、「目標の明確化と能力開発」、「自律的な進路選択行動」の3つを学生に達成してもらうことを目的に、全学的なキャリア教育体制を整備してきた。女性のライフキャリアを理解し、自律的なキャリア開発をするための知識とスキルを修得できるよう、主要なキャリア理論等に基づく科目群を展開するとともに、卒業生や企業、自治体とも連携を図っている。そして、今後さらに教育プログラムを発展させていくには、現在の学生のキャリア意識や課題等を明らかにすることが必要と考え、2018年度入学生を対象に、1年次と卒業時に、キャリア意識について縦断的調査を実施した(鶴田, 2023)。その結果、女子大学生の多くは、「仕事か、家庭か」の二者択一で考えているのではなく、1年次から既に「仕事も家庭も」志向であることが分かった。そして卒業時には、「仕事も家庭も」

志向がさらに強まる傾向にあった。

この結果は近年の若い世代の理想とする生き方を反映しているといえる。5年毎に実施される「出生動向基本調査」は、若者や子育て世代の行動や意識の変化を捉えてきた。2021年に行われた調査では、18～34歳の未婚女性のライフコースの理想像は、「両立コース」が5年前に行った前回調査の32.3%から34.0%に増加し、初めて最多となった。「非婚就業コース」も増加しているが、「再就職コース」は前回の34.6%から26.1%に、「専業主婦コース」は18.2%から13.8%に減少した。そして、結婚相手に求める条件として、7割が相手の「家事・育児の能力や姿勢」を重視していた。また、18～34歳の未婚男性がパートナーとなる女性に望むライフコースでは、「再就職コース」が前回の37.4%から29.0%に減少、「専業主婦コース」が10.1%から6.8%に減少した一方で、「両立コース」は33.9%から39.4%に増加し、最多となった。(国立社会保障・人口問題研究所, 2023)。

また、社会情勢によってもキャリア意識は影響を受けると考えられる。2020年の新型コロナウイルス感染拡大に対処するためのテレワークの普及が、男性の家事や育児への参画の拡大を促す結果となり、性別にかかわらず仕事と家庭のバランスの実現につながること

が期待される（内閣府男女共同参画局，2023）ように，大学生にとっても，コロナ禍での経験がキャリア意識や自己成長に影響を及ぼしている可能性がある。

成長の時となる大学時代に，学生たちは学内での学びや様々な活動に取り組んでいる。学外においてもアルバイトや就職活動等に力を入れている。2018年度入学生を対象にした調査では，これらの経験が成長を促し，長期的なキャリアを考えることにもつながっていることが分かった（鶴田，2023）。このように，1年次と卒業時に縦断的調査をすることによって，キャリア意識の変化と成長を促すことを明らかにすることは意義がある。さらに，入学年度の異なる学生たちからなるコホートを比較することにより，社会情勢の影響等も検討することができる。

本研究の結果を活用し，就職後も学生たちが望むキャリアを実現させながら，自分らしい生き方を選択できるように，今の時代のニーズに合うキャリア教育プログラムを構築していきたい。

## 2. 本研究の目的

このように若い世代の考え方や行動が変化していく中，学生のキャリア意識を把握し支援していくことが大学に求められる。本研究では，学生のキャリア意識（仕事志向・家庭志向）について検討する。および，鶴田（2023）による分析で，キャリア意識を規定する要因であることが確認された人格特性である「平等主義的性役割観」，「心の健康」，「自己効力感」，「ソーシャルスキル」，「活動性」，「持久性」が，1年次と卒業時でどのように変化するかを検討する。そして，大学生活を通じて自分自身の成長を促したことを，学生がどのように捉えているかについても明らかにする。加えて，入学年度の異なる学生たちを対象に

した縦断的調査を比較することによって，社会情勢の影響を検討することを目的とする。

## 方 法

### 1. 調査対象者および調査手続き

金城学院大学の2018年度および2019年度入学生を対象にした。1年次のキャリア開発科目の授業時間中に質問紙を配布し，その場で回答を求めた。また，卒業時にGoogleフォームを利用して質問紙調査を実施した。どちらの調査も匿名で実施され，統計的に処理がなされることを文章で説明し，さらに調査協力に同意した者のみ回答をするよう依頼した。

2018年度入学生では，1年次と卒業時の両方で回答したのは138名であった。また，2019年度入学生では，1年次と卒業時の両方で回答したのは125名であった。

調査期間は，2018年度入学生に対しては2018年10月～11月（1年次）と2022年3月（卒業時），2019年度入学生に対しては2019年10月～11月（1年次）と2023年3月（卒業時）であった。

### 2. 調査項目

#### 平等主義的性役割観

平等主義的性役割態度スケール（SESRA）の短縮版（鈴木，1994）の中から「結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである」「女性の居るべき場所は家庭であり，男性の居るべき場所は職場である」「家事は男女の共同作業である」「男の子は男の子らしく，女の子は女の子らしく育てることが非常に大切である」「女性は家事や育児をしなければならないから，フルタイムで働くよりパートタイムで働いたほうがよい」の5項目を尋ねた。回答は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（4点）の4件法である。

反転項目4項目を含み、回答は得点の高い方が、性役割観が平等主義的であるように修正された。

### 心の健康

ハピネス尺度（植田・吉森・有倉，1992）の中から「毎日が充実している」「将来に夢を持っている」「生き方に自信を持っている」「少しずつ成長しているような気がしている」「人に誇れるものがある」の5項目を尋ねた。回答は「そう思わない」（1点）から「そう思う」（4点）の4件法である。

### 自己効力感

Generalized Self-Efficacyの邦訳版である特性的自己効力感尺度（成田・下沖・中里・河合・佐藤・長田，1995）の中から「自分が立てた計画はうまくできる自信がある」「初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける」「重要な目標を決めて行うときは、ほとんど成功する」「困難に立ち向かうこともいとわない」「何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる」の5項目を尋ねた。回答は「そう思わない」（1点）から「そう思う」（4点）の4件法である。

### ソーシャルスキル

Kiss-18（菊池，1988）の中から「他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができる」「他人を助けることを、上手にやれる」「周りの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できる」「気まづいことがあった相手と、上手に和解できる」「自分の感情や気持ちを、素直に表現できる」「何か失敗したとき、すぐに謝ることができる」の6項目を尋ねた。回答は「いつもそうでない」（1点）から「いつもそうだ」（4点）の4件法である。

### 活動性

新性格検査（柳井・柏木・国生，1987）の下位尺度「活動性」の項目の中から「人から

リーダーとして認められたい」「友達よりもてきぱきと仕事ができる」「何事にも積極的に取り組む」「いつもやる気がある」「思い立ったらすぐに実行する」の5つを尋ねた。回答は「全くあてはまらない」（1点）から「非常によくあてはまる」（4点）の4件法である。

### 持久性

新性格検査（柳井ら，1987）の下位尺度「持久性」の項目の中から「やりかけたことは最善をつくす」「こつこつやるほうだ」「面倒な作業でも投げ出さずにやれる」「やりかけた仕事は一生懸命最後までやる」「将来のためならどんな辛さにも耐えられる」の5つを尋ねた。回答は「全くあてはまらない」（1点）から「非常によくあてはまる」（4点）の4件法である。

### 大学時代の活動

「学業」「資格取得」「語学研修」「ボランティア」「部活動」「趣味」「アルバイト」「インターンシップ」「就職活動」について、その活動を大学時代に頑張った程度を、卒業時に尋ねた。「全く頑張らなかった」（1点）から「とても頑張った」（4点）の4件法で回答を求めた。

### 仕事志向

「働くことに魅力を感じている」「就職先を考える時に、自分自身で大切にしたいものがある」「卒業後は、働いて経済的に自立したい」「将来について、自分なりに夢や理想がある」「なぜ働くのか」目的や意味について自分なりの考えがまとまっている」「いろいろな人の生き方・働き方に関心がある」「就職した自分をイメージすると、ちょっとわくわくする」「仕事を選ぶ時は、最終的には自分で決断しなければならないと思う」「就職活動を通じて、自分の可能性が広がると思う」「どういう場所（国内・海外・都会・地

方等)で、どんな生き方をしたいか考えている」の10項目を尋ねた。回答は「全くあてはまらない」(1点)から「非常によくあてはまる」(4点)の4件法である。

### 家庭志向

「結婚して家庭を持つこと」「子どもを産み、育てること」「家族団らんを楽しむこと」「家族の役に立つこと」「家族とのきずなを大切にすること」の5項目が、将来の自分にとってどの程度重要か尋ねた。回答は「重要ではない」(1点)から「とても重要である」(4点)の4件法である。

### 成長を促したこと

卒業時に、大学4年間を振り返り、自分自

身の成長を促したことについて尋ね、自由に記述をしてもらった。

## 結果

### 1. 変数間の関係性

Table 1は2018年度入学生の1年次、Table 2は2018年度入学生の卒業時、Table 3は2019年度入学生の1年次、Table 4は2019年度入学生の卒業時における、各変数の平均値、標準偏差、信頼性係数、変数間の相関係数を示したものである。分析にはピアソンの積率相関分析を使用した。

Table 1. 2018年度入学生 1年次の各変数の平均値、標準偏差、信頼性係数、変数間の相関係数

	平均値	SD	α係数	1	2	3	4	5	6	7
1 平等主義的性役割観	3.18	0.44	.605							
2 心の健康	2.64	0.68	.846	-.045						
3 自己効力感	2.52	0.50	.716	.029	.455**					
4 ソーシャルスキル	2.65	0.50	.760	.032	.349**	.548**				
5 活動性	2.37	0.52	.671	.062	.472**	.615**	.556**			
6 持久性	2.79	0.50	.640	-.053	.359**	.522**	.456**	.530**		
7 仕事志向	3.00	0.50	.826	.208*	.503**	.386**	.322**	.404**	.356**	
8 家庭志向	3.21	0.75	.907	-.348**	.348**	.283**	.354**	.352**	.363**	.210*

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

Table 2. 2018年度入学生 卒業時の各変数の平均値、標準偏差、信頼性係数、変数間の相関係数

	平均値	SD	α係数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1 平等主義的性役割観	3.48	0.45	.711																
2 心の健康	2.86	0.68	.855	.115															
3 自己効力感	2.68	0.57	.732	.049	.640**														
4 ソーシャルスキル	2.80	0.54	.780	.071	.475**	.527**													
5 活動性	2.56	0.57	.637	-.008	.548**	.629**	.558**												
6 持久性	3.00	0.55	.752	.089	.446**	.688**	.418**	.549**											
7 学業	3.32	0.70	.179*	.375**	.282**	.240**	.274**	.291**											
8 資格取得	3.01	0.99	.132	.192*	.230**	.105	.207*	.235**	.348**										
9 語学研修	1.48	0.85	-.019	.180*	.231**	.162	.274**	.172*	.082	.009									
10 ボランティア	1.82	1.02	.038	.212*	.237**	.217*	.168*	.191*	.233**	.230**	.009								
11 部活動	2.40	1.26	-.094	.164	.056	.122	.187*	.127	.054	-.023	.024	.073							
12 趣味	3.15	0.88	.158	.317**	.228**	.195*	.204*	.179*	.340**	.056	.047	.127	.129						
13 アルバイト	3.54	0.71	.025	.304**	.233**	.111	.200*	.234**	.171*	.025	.087	.063	.014	.318**					
14 インターンシップ	2.09	1.08	-.006	.156	.182*	.114	.264**	.279**	.213*	.186*	.252**	-.002	.136	.047	.153				
15 就職活動	3.24	0.86	.090	.232**	.305**	.293**	.383**	.338**	.278**	.133	.154	.258**	.071	.285**	.144	.379**			
16 仕事志向	3.20	0.45	.796	.176*	.626**	.606**	.470**	.522**	.532**	.283**	.166	.259**	.294**	.107	.149	.246**	.270**	.359**	
17 家庭志向	3.16	0.71	.860	-.283**	.280**	.270**	.222**	.315**	.324**	.128	.246**	.128	.114	.176*	.049	.079	.154	.207*	.249**

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

Table 3. 2019年度入学生 1年次の各変数の平均値, 標準偏差, 信頼性係数, 変数間の相関係数

	平均値	SD	α係数	1	2	3	4	5	6	7
1 平等主義的性役割観	3.26	0.54	.802							
2 心の健康	2.63	0.64	.819	.090						
3 自己効力感	2.67	0.53	.723	-.055	.556**					
4 ソーシャルスキル	2.66	0.49	.729	-.034	.434**	.551**				
5 活動性	2.42	0.57	.736	.024	.556**	.622**	.558**			
6 持久性	2.88	0.57	.750	.044	.379**	.596**	.329**	.563**		
7 仕事志向	3.06	0.53	.849	.317**	.545**	.476**	.451**	.553**	.471**	
8 家庭志向	3.28	0.66	.852	-.254**	.133	.259**	.324**	.271**	.293**	.163

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

Table 4. 2019年度入学生 卒業時の各変数の平均値, 標準偏差, 信頼性係数, 変数間の相関係数

	平均値	SD	α係数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1 平等主義的性役割観	3.44	0.48	.707																
2 心の健康	2.88	0.73	.880	-.081															
3 自己効力感	2.75	0.58	.773	-.095	.684**														
4 ソーシャルスキル	2.76	0.53	.759	-.107	.464**	.520**													
5 活動性	2.53	0.68	.803	.020	.633**	.732**	.542**												
6 持久性	2.97	0.56	.762	-.016	.551**	.655**	.396**	.577**											
7 学業	3.24	0.74	.060	.340**	.310**	.204*	.182*	.241**											
8 資格取得	2.85	1.02	.048	.239**	.245**	.160	.154	.127	.364**										
9 語学研修	1.60	0.90	.018	.217*	.162	.284**	.204*	.242**	.155	.194*									
10 ボランティア	1.98	1.06	-.030	.204*	.227**	.195*	.310**	.220*	.087	.139	.211*								
11 部活動	2.00	1.25	.008	.298**	.167	.325**	.267**	.283**	.069	-.056	.049	.139							
12 趣味	3.09	0.94	.270**	.234**	.125	.174	.150	.170	.130	-.003	.116	-.015	.236**						
13 アルバイト	3.35	0.78	.166	.198*	.160	.254**	.362**	.086	-.019	.016	.132	.103	.033	.272**					
14 インターンシップ	2.43	1.14	-.022	.317**	.270**	.220*	.303**	.253**	.040	.104	.222*	.138	-.011	-.012	.244**				
15 就職活動	3.22	0.90	-.135	.309**	.305**	.268**	.267**	.358**	.100	.210*	.100	.121	.078	.108	.241**	.497**			
16 仕事志向	3.18	0.52	.848	.015	.695**	.580**	.399**	.633**	.575**	.177*	.093	.263**	.200*	.248**	.153	.212*	.305**	.362**	
17 家庭志向	3.01	0.84	.900	-.311**	.391**	.394**	.372**	.358**	.280**	-.012	-.003	.104	.183*	.064	-.145	.078	.195*	.112	.345**

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

Table 5. 入学年度と学年による各変数の平均値の比較

		2018年度入学生		2019年度入学生		年度の主効果 F値	学年の主効果 F値	交互作用 F値
		1年次	卒業時	1年次	卒業時			
平等主義的性役割観	M	3.18	3.48	3.26	3.44	0.12	81.02 ***	4.77 *
	SD	(0.44)	(0.45)	(0.54)	(0.48)			
心の健康	M	2.64	2.86	2.63	2.88	0.01	30.382 ***	0.13
	SD	(0.68)	(0.68)	(0.64)	(0.73)			
自己効力感	M	2.52	2.68	2.67	2.75	2.85	13.253 ***	1.45
	SD	(0.50)	(0.57)	(0.53)	(0.58)			
ソーシャルスキル	M	2.65	2.80	2.66	2.76	0.19	15.247 ***	0.42
	SD	(0.50)	(0.54)	(0.49)	(0.53)			
活動性	M	2.37	2.56	2.42	2.53	0.01	23.672 ***	1.68
	SD	(0.52)	(0.57)	(0.57)	(0.68)			
持久性	M	2.79	3.00	2.88	2.97	0.41	19.273 ***	3.22
	SD	(0.50)	(0.55)	(0.57)	(0.56)			
仕事志向	M	3.00	3.20	3.06	3.18	0.14	21.827 ***	1.41
	SD	(0.50)	(0.45)	(0.53)	(0.52)			
家庭志向	M	3.21	3.16	3.28	3.01	0.21	15.151 ***	6.40 *
	SD	(0.75)	(0.71)	(0.66)	(0.84)			

\*  $P < .05$  \*\*\*  $P < .001$

## 2. 入学年度と学年による各変数の平均値の比較

入学年度と学年による人格特性とキャリア意識の各変数の差異を検討するために、入学年度と学年を要因とする2×2の分散分析を行った (Table 5)。

人格特性のすべての変数が、2018年度、

2019年度入学生とも、1年次と比較して卒業時の平均値が上昇していた。キャリア意識においては、「仕事志向」の平均値は上昇した一方、「家庭志向」の平均値は低下した。これらすべての変数において学年の違いによる有意な主効果が認められたが、入学年度の違いによる有意な主効果は見られなかった。

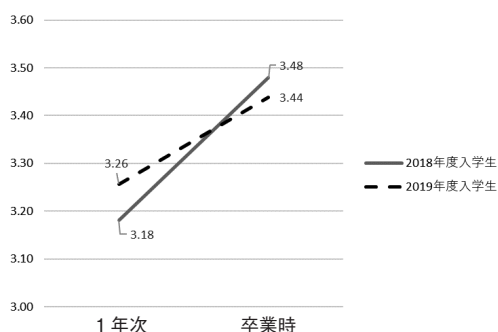


Figure 1. 平等主義的性役割観の入学年度別平均値

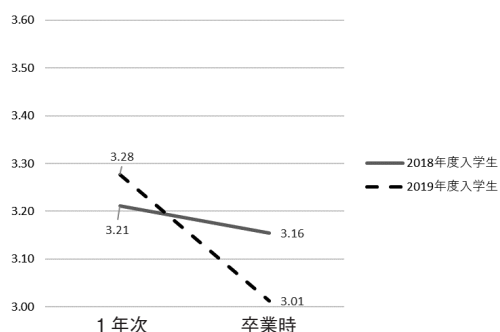


Figure 2. 家庭志向の入学年度別平均値

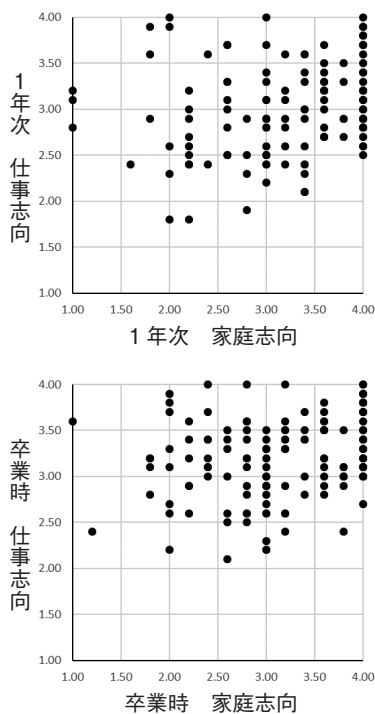


Figure 3. 2018年度入学生 仕事志向・家庭志向得点散布図

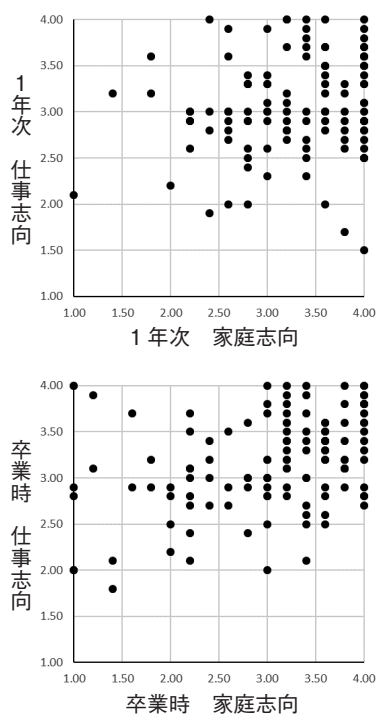


Figure 4. 2019年度入学生 仕事志向・家庭志向得点



入学年度と学年による有意な交互作用があったのは、「平等主義的性役割観」(Figure 1)と「家庭志向」(Figure 2)であった。2019年度入学生の卒業時の「家庭志向」は、大きく低下していた。

入学年度別に、1年次と卒業時の「仕事志向」・「家庭志向」における全調査対象者の得点の散布図を示す(Figure 3, 4)。2019年度入学生は、卒業時の「家庭志向」が低下していることが、散布図からも分かる。

### 3. クラスタ分析による調査対象者の分類

調査対象者を分類するために、2018年度と2019年度入学生をあわせた全員の卒業時の「仕事志向」と「家庭志向」の変数を用いて

大規模ファイルのクラスタ分析を実施した。クラスタ数を3, 4, 5, 6で試行した結果、4の場合に最も解釈しやすいグループ化ができたため、4クラスタを採用した(Table 6, Figure 5)。

第1クラスタは、「仕事志向」と「家庭志向」がともに高得点であったため、「仕事も家庭も希求型」と名付けた。第2クラスタは、「仕事志向」は高いが、「家庭志向」は低いので、「仕事優先型」と命名した。第3クラスタは、どちらも平均値を大きく下回るので「将来のイメージ希薄型」と名付けた。第4クラスタは、「仕事志向」と「家庭志向」ともに平均値に近いので「仕事も家庭もほどほど型」と名付けた。

Table 6. クラスタ分析の結果と人数

クラスタ	1	2	3	4	
	仕事も家庭も希求型	仕事優先型	将来のイメージ希薄型	仕事と家庭ほどほど型	
仕事志向	3.47	3.42	2.53	2.84	
家庭志向	3.72	2.18	1.71	3.06	
人数	118	44	23	78	TTL 263
<内訳>					
18年度入学生	59(43%)	29(21%)	6(4%)	44(32%)	TTL 138
19年度入学生	59(47%)	15(12%)	17(14%)	34(27%)	TTL 125

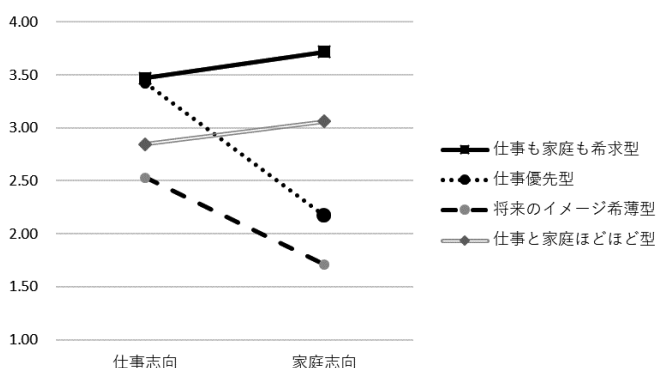


Figure 5. 各クラスタの特徴

Table 7. クラスタ別 各変数の平均値

	仕事も家庭も希求型		仕事優先型				将来のイメージ希薄型		仕事と家庭ほどほど型							
	18年度入学生		19年度入学生		18年度入学生		19年度入学生		18年度入学生		19年度入学生					
	n=59 (43%)		n=59 【47%】		n=29 (21%)		n=15 【12%】		n=6 (4%)		n=17 【14%】		n=44 (32%)		n=34 【27%】	
	1年次	卒業時	1年次	卒業時	1年次	卒業時	1年次	卒業時	1年次	卒業時	1年次	卒業時	1年次	卒業時	1年次	卒業時
仕事志向	3.11	3.42	3.21	3.50	3.06	3.41	3.18	3.46	2.58	2.54	2.81	2.52	2.90	2.86	2.88	2.83
家庭志向	3.58	3.79	3.56	3.64	2.59	2.27	2.81	2.01	2.24	1.84	2.48	1.66	3.21	3.02	3.41	3.09
<人格特性>																
平等主義的性役割観	3.11	3.39	3.18	3.35	3.36	3.75	3.57	3.77	3.33	3.57	3.48	3.66	3.12	3.40	3.10	3.33
心の健康	2.78	3.18	2.82	3.25	2.73	2.94	2.65	2.92	1.87	1.80	2.25	2.05	2.51	2.55	2.45	2.66
自己効力感	2.58	2.91	2.81	3.03	2.50	2.72	2.66	2.73	2.07	1.80	2.29	2.13	2.54	2.50	2.61	2.62
ソーシャルスキル	2.79	3.01	2.79	2.99	2.58	2.80	2.48	2.54	2.58	2.44	2.39	2.43	2.62	2.56	2.63	2.67
活動性	2.56	2.80	2.63	2.83	2.30	2.56	2.45	2.57	1.73	2.00	2.06	1.79	2.27	2.31	2.23	2.35
持久性	2.87	3.24	3.00	3.15	2.71	3.04	2.89	3.19	2.33	2.23	2.54	2.42	2.80	2.77	2.89	2.88
<大学時代に頑張ったこと>																
学業		3.46		3.31		3.34		3.13		3.00		3.24		3.16		3.12
資格取得		3.12		2.90		2.86		2.53		2.00		2.94		3.07		2.82
語学研修		1.62		1.71		1.38		1.60		1.17		1.29		1.43		1.59
ボランティア		1.97		2.24		2.00		1.47		1.17		1.71		1.59		1.94
部活動		2.60		2.19		2.45		2.07		1.67		1.71		2.20		1.85
趣味		3.27		3.05		3.21		3.67		3.33		3.06		2.89		3.03
アルバイト		3.63		3.41		3.59		3.47		3.00		3.00		3.43		3.41
インターンシップ		2.34		2.69		1.96		2.33		1.67		2.00		1.95		2.21
就職活動		3.47		3.37		3.14		3.33		2.83		2.76		3.02		3.18

各クラスタの人数では、「仕事も家庭も希求型」が一番多かった。また、「将来のイメージ希薄型」の人数が、2019年度入学生では、17名（14%）に増加している。

クラスタごとに、入学年度別の1年次と卒業時の各変数の平均値を、Table 7に示す。

#### 4. 「成長を促したこと」頻出語の共起ネットワーク

「大学4年間を振り返って、あなたの成長を促したこと」についての自由記述では、264の文と5,971語の総抽出語数が得られたので、共起ネットワーク分析を行った。共起

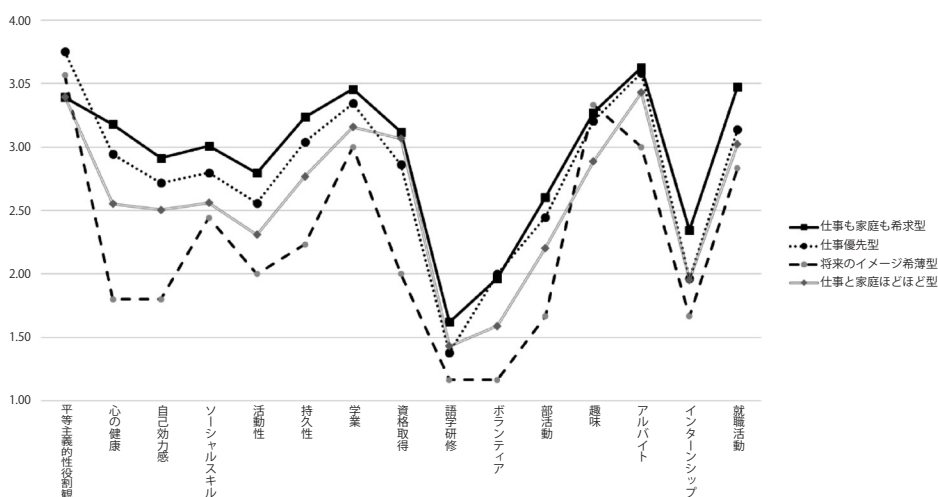


Figure 6. 2018年度入学生 卒業時のクラスタ別 各変数の平均値



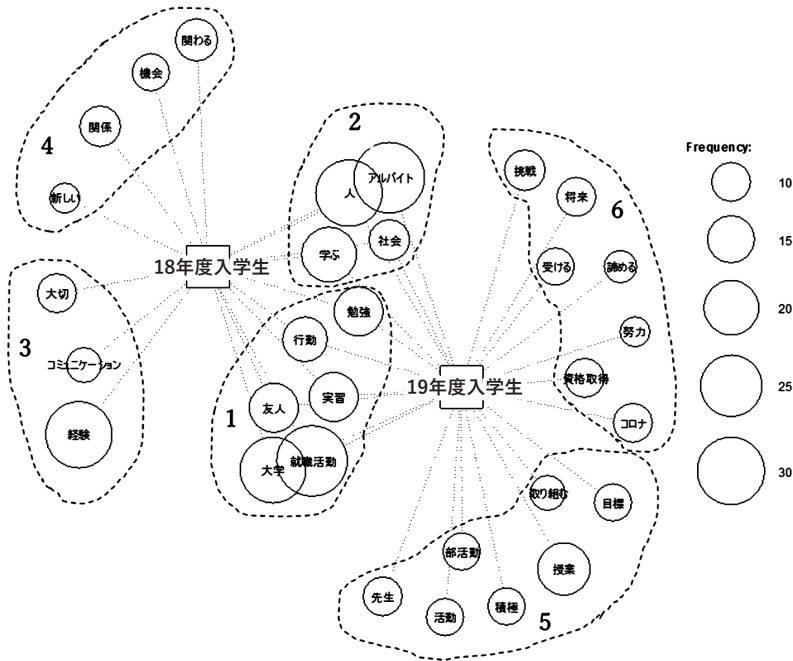


Figure 8. 成長を促したことについての自由記述の共起ネットワーク分析

ネットワーク分析とは、抽出された「語」同士がどのように似通った文脈で使用されているかをネットワーク図で確認する手法である。共起ネットワーク図において、出現回数は図形（円）の大きさに比例し、共起・関連の強さは図形の位置や近さではなく線で接続され

ているか否かとその強さで表現されている（樋口，2004）。語の最小出現数を5とし、描画する共起関係は35までとして、「入学年度」を外部変数に用いた分析を行った（Figure 8）。その結果、成長を促したことに関する記述は、6つのグループに分けられた。その内訳

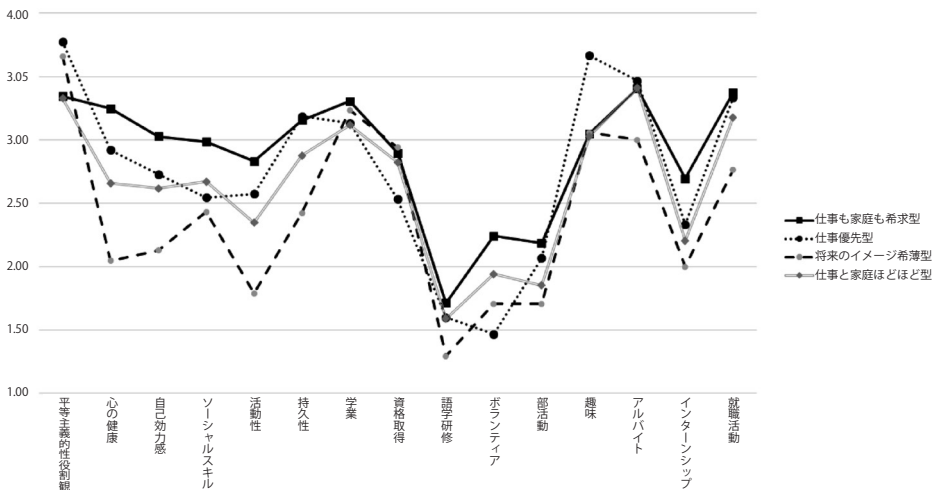


Figure 7. 2019年度入学生 卒業時のクラスター別 各変数の平均値

Table 8. グループ別頻出語と文章例

	グループ	頻出語(数)	文章例
年度共通	1 大学での学び	就職活動(33) 大学(28) 実習(16) 勉強(16) 友人(16) 行動(13)	大学のキャリア教育や就職活動をサポートする体制、のびのびと学習出来る環境が整っていたおかげです。 様々な考えの友人や先生と出会い、自分の中で物事に対する考え方や見方が変わった。 教育実習、免許取得のための膨大な授業、それらを1人ではなく同じ志をもつ仲間たちと頑張れたことが成長を促したと思います。 実習や卒業論文など、高校までの勉強とは違う主体的な活動で得られたものはとても大きかったです。 自分の悪い点や良い点、将来のビジョンなど自分がどのような人間なのかを非常に理解することができ、そこから今自分はどのような行動を起こすべきなのか考え行動する力がついたと考えます。
	2 仕事からの学び	アルバイト(33) 人(29) 学ぶ(20) 社会(11)	アルバイト先などで社会人の方々とたくさん交流したこと。 飲食店のアルバイトで、社会での人との接し方や接客の心意気を学んだこと。 アルバイトで初対面の人と話し、周りをよく見ることを覚え、就職活動の際にも面接などで活かした。 アルバイト経験では、マナーや社会性が身に付いた。 趣味関連で出来た社会人との繋がりによって、働くイメージが明確になった。
18年度入学生	3 様々な経験	経験(29) 大切(10) コミュニケーション(8)	普段の自分ならばやらない事でも、頼まれたからちょっとやってみようかなと挑戦してみたらなど、様々な経験をして、というところが成長を促したと言えたと感じました。 友人と参加したインターンシップ、接客アルバイト経験が、高校までの内気な自分の性格を良い方向へ変えたと感じます。 来客者の方への質問に答えていく過程で、自分のコミュニケーション能力が上がっていきと共に、人の役に立っている達成感を得ることができました。 児童施設訪問を通じて、色々な年代の方々とコミュニケーションを取ることができました。 やりたいと思ったことはすぐに行動に移すこと、素直でいること、人とのつながりを大切にすることが成長につながった。
	4 人との関わり	関わる(12) 関係(11) 機会(9) 新しい(6)	アルバイトや留学生とのシェアルーム、学園祭実行委員会などの他者と関わる活動をたくさん経験し、他者の意見やどのように大勢と関わるべきなのか学ぶことが出来たため、自分の成長に繋がりました。 大学で新しい人間関係の構築ができたことです。 様々な考えを持つ人と関わる機会を得たこと 大学の友人やボランティア団体の仲間と関わることによって視野が広がった。 他の学生の子や先生、職員の方など、多くの他者と関係することで、自分のことも以前より深く考えられるようになり、他者との相互的な関係性やその距離感について以前より適応的になった気がします。
19年度入学生	5 授業への取り組み	授業(18) 先生(10) 積極(9) 活動(9) 部活動(9) 目標(9) 取り組む(8)	オンライン授業のためかもしれないが、複数のタスクの期限を確認しそれぞれが遅れないように並行して進める能力が身についた。 特にオンライン授業では、大学・先生からのお知らせをしっかり見て、分からないことなどは他の子や先生にSNSやメール、manabaを使って連絡するなど自分に必要なことを見極める力や自主的に考え、行動する力が身についたと思います。 大学が早くから就職活動や将来に向けての授業をしてくれることで、他の大学の予選より早くから将来について考えることができたと思います。 友人にどうしても負けてくなくて全ての授業に積極的に取り組み、資格取得と成績優秀者表彰を成し得たこと。 先生方や先輩、友人の力を借りて楽しみながら目標に向かって努力し続けることができたという経験も自身の成長を促してくれたと思っています。
	6 コロナ禍での挑戦	挑戦(11) コロナ(10) 資格取得(10) 将来(10) 受ける(9) 諦める(7) 努力(6)	コロナ禍に入った頃はなかなか動き出せなかったものの、何も進まない状況に「自分から動かないと何もできないんだ」と実感し、授業やサークル、就職活動で積極的に動けるようになったと感じます。 新型コロナウイルスによる外出自粛の中、家で本を読み漁り、考える力が身についたこと。 コロナでエアラインへの道が断たれてしまったことが、簿記などの資格取得へつながったので、コロナという不測の事態が私を成長させてくれたと思います。 コロナ禍という厳しい状況でしたが、明日がどうなるかわからないからこそ、後悔のないようにやりたいことにすぐ挑戦してみる決断力や行動力が養われたのではないかと感じています。 初めから無理だと決めつけて諦めないで、やるだけやってみることが大事だと思いました。

は、2018年度と2019年度入学生に共通するグループが2つ、2018年度入学生のみに関わるグループが2つ、そして、2019年度入学生のみに関わるグループが2つであった。Table 8にグループ内での頻出語数とそれぞれの文例をまとめた。

2018年度と2019年度入学生に共通するグループの1つ目は、「大学」「勉強」「実習」「就職活動」等の語句があったので、「大学での学び」と命名した。2つ目は「アルバイト」「人」「社会」等の語句が抽出されたため、「仕

事からの学び」と名付けた。

2018年度入学生のみに関わる1つ目として「経験」「コミュニケーション」等をまとめて「様々な経験」とし、2つ目のグループは「関係」「関わる」「機会」等があるので「人との関わり」と命名した。

2019年度入学生のみに関わる1つ目は、「授業」「先生」「取り組む」等がある「授業への取り組み」、2つ目のグループは、「コロナ」「挑戦」「努力」等から成る「コロナ禍での挑戦」とそれぞれ命名した。

## 考 察

### 1. 女子大学生のキャリア意識「仕事も家庭も」

本研究では、2018年度と2019年度に入学した女子大学生を対象に、1年次と卒業時のキャリア意識（仕事志向・家庭志向）を分析した。

1年次には、「仕事志向」の平均値は3.00（2018年度入学生）、3.06（2019年度入学生）であり、また、「家庭志向」の平均値は3.21（2018年度入学生）、3.28（2019年度入学生）であった（Table 5）。尺度の最大値が4なので、ともに高い傾向にある。卒業時には、「仕事志向」はさらに上昇したが、「家庭志向」は若干の低下がみられた。「家庭志向」の低下は、「仕事志向」・「家庭志向」得点の散布図（Figure 3, Figure 4）からも見て取れる。特に、2019年度入学生は、2018年度入学生と比較して、卒業時の「家庭志向」が低下傾向にある（Figure 2）。

さらに詳しく調べるために、2018年度と2019年度入学生をあわせた全員の卒業時の「仕事志向」と「家庭志向」の変数を用いてクラスタ分析を行った。その結果、「仕事も家庭も希求型」、「仕事優先型」、「将来のイメージ希薄型」、「仕事も家庭もほどほど型」に分類することができた（Table 6）。「仕事も家庭も希求型」と「仕事も家庭もほどほど型」を合わせると75%の学生が該当した。これは、2021年に実施された「出生動向基本調査」（国立社会保障・人口問題研究所、2023）で、「両立コース」が18～34歳の未婚女性のライフコースの理想像の最多となったことと一致する。

「家庭志向」へ負の影響が確認された「平等主義的性役割観」（鶴田、2023）は、全てのクラスタで1年次に比べ卒業時の方が高く

なっているが、「家庭志向」についてはクラスタによる違いがあった（Table 7）。全体の人数の4割以上を占める「仕事も家庭も希求型」の学生は、1年次に比べて卒業時の「家庭志向」得点が増している。一方、他の3つのクラスタに属する学生は、卒業時の方が低くなっている。特に、2019年度入学生にこの傾向が強い。「出生動向基本調査」（国立社会保障・人口問題研究所、2023）で、結婚相手に求める条件として、7割の女性が相手の「家事・育児の能力や姿勢」を重視していることが報告されているように、今後も社会において「平等主義的性役割観」の高まりが予想されるが、「仕事も家庭も希求型」の人々の「家庭志向」は上昇傾向に、これ以外の「仕事優先型」、「将来のイメージ希薄型」、「仕事も家庭もほどほど型」の人々の「家庭志向」は下降傾向にというように、キャリア意識は分かれていくかもしれない。

### 2. 「将来のイメージ希薄型」「仕事も家庭もほどほど型」学生への個別支援の必要性

キャリア意識を規定する人格特性「平等主義的性役割観」、「心の健康」、「自己効力感」、「ソーシャルスキル」、「活動性」、「持久性」の平均値は、2018年度、2019年度入学生ともに、1年次より卒業時の方が上昇していた（Table 5）。

しかし、クラスタ分析を行うと、「将来のイメージ希薄型」の学生は、「心の健康」、「自己効力感」、「持久性」が2018年度、2019年度入学生ともに、1年の時点で他のクラスタの学生に比べて低い得点で、卒業時にはさらに低下していた（Table 7）。「将来のイメージ希薄型」の学生には個別の支援等、サポートの在り方を考える必要がある。

「仕事志向」と「家庭志向」がともに平均値に近い「仕事も家庭もほどほど型」の学生

は、一見、ワークライフバランス的にも見受けられる。しかしながら、仕事と家庭の両方を選択するためには高い自己効力感が必要である（太田、久保田、山田、高城、漁田、日隈、2019）が、「仕事も家庭もほどほど型」の学生の「自己効力感」は、卒業時に上昇が見られなかった。「仕事志向」も「家庭志向」も選びきれていないともいえる。「仕事も家庭もほどほど型」は全体の約30%を占めるので、大学として学生の「自己効力感」を向上させるような授業プログラムを提供する必要がある。

### 3. 入学年度（2018年度・2019年度）の違いについての検討

2018年度・2019年度入学生ともに、大学生活のうち約2年間を新型コロナウイルスが感染拡大する中で過ごした。2018年度入学生は、緊急事態宣言が発令された2020年4月から2021年9月までの期間は、3年次と4年次にあたる。2019年度入学生は、2年次と3年次であった。コロナ禍に大学生の学生生活を調査した石川（2022）によると、低学年の方が体調不安や生活制限ストレスなどが高まっていた。

入学年度と学年による人格特性とキャリア意識の各変数の差異を検討するために、入学年度と学年を要因とする2×2の分散分析を行ったが、入学年度の有意な主効果はみられなかった（Table 5）。しかしながら、クラス分析において、「心の健康」と「自己効力感」が低く、今後の個別支援が必要と考えられる「将来のイメージ希薄型」の人数が、2018年度入学生は6名（4%）のみであったが、2019年度入学生では17名（14%）に増加している（Table 7）。コロナ禍における不安やストレスが、「心の健康」と「自己効力感」の低下につながったのかもしれない。また、

「大学4年間で成長を促したこと」の自由記述を共起ネットワーク分析した結果でも、2019年度入学生にのみ語として「コロナ」が抽出された（Figure 8）。このことから、2019年度入学生の方がコロナ禍での経験の影響がより大きかったと考えられる。

### 4. 学生たちのさらなる成長のために

キャリア意識を規定する人格特性「平等主義的性役割観」、「心の健康」、「自己効力感」、「ソーシャルスキル」、「活動性」、「持久性」の平均値は、4年間で上昇している（Table 5）が、「活動性」は、1年次も卒業時も他の変数に比べて低い。また、「自己効力感」についても、1年次と卒業時がほぼ同じか、または下がった学生が半数近くを占める（Table 7）。Bandura（1977）によると、自己効力感は、遂行行動の達成、代理的体験、言語的説得、生理的・情動的喚起から影響を受ける。これらを大学のキャリア教育プログラムに取り入れるとすれば、目標の設定とその達成のために必要なミッションの設定、社会人との交流、グループワークでの相互承認やフィードバックの実施等が考えられる。

また、「大学4年間で成長を促したこと」の自由記述においても、「同じ志をもつ仲間たちと頑張れたこと」、「アルバイト先などで社会人の方々とたくさん交流したこと」、「他者と関わる活動をたくさん経験し、他者の意見やどのように大勢と関わるべきなのか学ぶこと」等が成長を促したと記されていた（Table 8）。そして、共起ネットワーク分析結果（Figure 8）から、2018年度、2019年度入学生に共通して「仕事からの学び」が、学生の成長を促したことが分かった。

これらのことから、企業等と連携した大学内外で実施するプロジェクト科目を広く展開することによって、参加した学生の「活動

性], 「自己効力感」等が高まり, 学生自らが成長を感じられるように支援していきたい。

今後の課題として, 学部, 学科によって学生の専門職志向の高低等の違いがあるため, 学部, 学科ごとの調査を実施していきたい。

## 引用文献

- Bandura, A. (1977) "Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change." *Psychological Review*, 84, 191-215
- 樋口耕一 (2004) テキスト型データの計量的分析 — 2つのアプローチの峻別と統合 — 理論と方法, 19, 101-115.
- 石川悦子 (2022) コロナ禍における大学生の学生生活に対する不安感とストレス こども教育宝仙大学紀要, 13, 13-20
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する一向社会的行動の心理とスキル — 川島書店
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2023) 2021年社会保障・人口問題基本調査 (結婚と出産に関する全国調査) 報告書

内閣府男女共同参画局 (2023) 男女共同参画白書令和5年版

成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995) 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—教育心理学研究, 43, 306-314

太田さつき・久保田貴之・山田一之・高城佳那・漁田武雄・日隈美代子 (2019) 女子大学生のキャリア選択に関する一考察 — キャリア教育への示唆 — 静岡産業大学論集, 25(1), 161-179

鈴木淳子 (1994) 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究 65(1), 34-41.

鶴田美保子 (2023) 女子大学生のキャリア意識に関する縦断的研究 — 1年次から卒業までの成長に着目して — 金城学院大学論集 人文科学編, 19(2), 155-166

植田智・吉森護・有倉巳幸 (1992) ハッピーネスに関する心理学的研究 — 2 — ハッピーネス尺度作成の試み 広島大学教育学部紀要41, 35-40.

柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子 (1987) 新性格検査における併存的妥当性の検証 プロマックス回転法による新性格検査の作成について (I) 心理学研究, 58, 158-165.